

サッカー部で得たもの

西高42期 奥村 英彦

サッカー部の部員にとって部活動とは何なのか？。これは各年代によってとらえ方が様々であるように思うが、概して勝つということが目標になっていると思う。私達の代も御多分にもれず、「勝つために練習をする」という意識が非常に強かった。勝つためにはどうしたら良いのか？自分達の弱点を克服する練習法とは何か？より実践的な練習法はないのか？私たち42期は当時のキャプテン安藤巧君を中心に常にこれらの問題を解くための自分達なりの練習方法を模索していた。

上の代がどのように練習メニューを組み立てていたか正確なところは覚えていないが、少なくとも私たちの代では、部の三役：キャプテン・副キャプテン・部長が、毎日のように監督であり顧問だった（現在もそうであるが）菅井先生のところに行き、自分達の考えている練習メニューを説明し、了解をもらえるように努めていた。もちろん、高校生が考えるメニューが完全なものであったかどうかの議論はあるだろうが、少なくとも自分達で満足できる内容を提案していたつもりである。純粋な高校生からすれば、菅井先生が練習メニューを受け取ってくれたということで、自分達のことを理解し、練習を任せてもらえると考えてしまうのは当然のことだったのかも知れない。

一方で、菅井先生からすれば、先生の理想とする、私達にプレーさせたいサッカーのスタイルというものがあった。相手ディフェンスの裏をとるロングパスをトップが処理し、そのままゴール前へ持ち込むかセンターリングを上げての勝負というものをプレーの基本と菅井先生が捉えていたのはよく理解できた。

しかしながら、キャプテンを中心とする高校生の首脳陣は、別のプレースタイルを追いかけていた。今でこそ当たり前になっているが、細かいパス交換で相手ディフェンスを崩し、スルーパスでチャンスを作る。ところが、これを実現するためには、自ずと練習メニューがボールタッチ重視、ダイレクト・ワンタッチのパスを正確に行うためのものになってしまう。パスの正確度、新展開への理解不足が多い部員にこれを求めてもそう簡単にうまく行くわけがない。自分達ではダイレクトパス交換による展開をしているつもりでも、後から考えるとインターパッシングのようにパスをつないでいるだけで、初めのうちは相手ゴールへなかなか攻めていけなかったが、2年生も後半になると、パスをつなぐだけでなく、ディフェンスを介して逆サイドに展開するような動きも身に付けていった。

一方でロングキックによる展開をめざす菅井先生の方式、他方でショートパスで展開を考える部員の求めるサッカースタイルが相入れないのは明らかで、練習メニューが根本的に異なるのは明らかだった。自分達が考えた練習メニューをやっている間に、菅井先生が登場してメニューががらりと変わるの日常茶飯事であった気がする。今から思えば、必要に応じて両方できるようになるのがBestなのだろうと思うが、当時の私達はあまりにも先鋭化しすぎて、菅

井先生に対する反発心が強くなっていく一方であった。

事件は2年生の3学期、修了式の日起こった。積もり積もる2年生の菅井先生の練習方針に対する不満。何と私達は菅井先生をある教室に呼び出して、2年生全員が先生に対する不満を1人ずつぶつけた挙げ句、「監督を辞めて下さい」と直訴したのである。

事件を起こす直前、私たち2年生は2年生のみのミーティングを何回か行った。私は個人的には大したことを考えていなかったように記憶しているが、多くの部員の不満は激しかった。内容的には既に記述してあるように、「先生と練習方針が合わない」、「主体的にやりたい」といった類のことだったと思うが、逆に私からすればみんなはこんなに真剣に考えているんだと驚かされた瞬間でもあった。

しかし、高校2年生はやはり甘かった。万全を期して全員の意見をまとめ、菅井先生には監督を退いていただき、顧問の先生としてサッカー部の面倒を見てもらう腹だった。どう考えても自分達に都合の良いシナリオを描いており、誰も大きな落とし穴が二つもあることに気付かなかったのである。

一つは、当時の顧問・部長であった三浦先生（現都立久留米高）の激怒である。冷静に考えれば、非常にアンフェアな形で菅井先生に監督退任を申し入れたのである。三浦先生の怒りはすさまじく、即刻部活動停止命令が出されてしまった。部員の目標である春の大会1ヶ月半前のことである。もう一つは、2年生のみの総意だったことである。この無茶な行動と部活動停止にしてしまった（身勝手な？）2年生に対して当時の1年生は反発した。

春休みは散々だった。部活動停止に対して、部員全員によるミーティングは連日続いた。1年生からは、事前の相談もなかったことに対する2年生への不信・不満。さらにはジェネレーションギャップとの発言も飛び出すほど、なかなか溝はうまらなかった。先生が入るとさらにひどかった。先生と生徒との関係と思えないような発言も飛び出し、部活動再開は全く見えない時期が一週間近くも続いた。

4月になった頃、超OBの寺田さんが高校にいらっしやっ。お互いの主張のおさめどころがなくなっていた矢先、寺田さんは私たちの話をよく聞いてくれた。今思えば、どれだけ私達の話の正当性をくんで下さったのかわからないが、OB代表として、この前代未聞の事件の調停を引き受けて下さったのである。それも私達の主張がほぼ100%かなう方向で……。

信じがたいことであったが、私達の要求通りに部活動が再開した。新3年生となった私達の練習に取り組む姿勢が大きく変わったのは明らかだった。「全部自分達でやる」このことがどれだけ練習に打ち込ませたことか……。たった1ヶ月半の間にどれだけの技術が身についたかは測る尺度もないが、少なくとも自分達の心がたくましくなったのは本当だと思う。大会の結果からすれば、実力はそんなにつかなかったのかも知れない。けれども非常に大きな充実感が残ったのは事実である。

私たちのとった行動は、後輩達に多大な影響を残してしまった。今から考えれば、もっとスマートな方法もあったのかも知れないが、やってしまった以上後のまつりである。やり方として、菅井先生に申し訳なく思っているのは私だけではないと思うが、大きな犠牲の上に簡単にはつかめない何かを得たように思う。サッカーをする楽しさを知ったのはもちろんであるが、

自分の目標を実現するために、自分自身に厳しくなることと達成した時の充実感、そして一生本気でつき合っている同期という友人達。書きながら、何か照れくさいが、私には素晴らしい宝物が埋まっていた場だったなと感じる。高校の部活動で得たもの、それは今後の人生で必要になる大切な何かだと信じて疑いません。

末筆ながら、高校卒業以後も親しくつき合っていた菅井先生、三浦先生に感謝申し上げます。また、後輩の指導に尽力して下さった寺田さん（3期）や大塚さん（35期）をはじめとする諸先輩方にこの場を借りて御礼申し上げます。

西高サッカー部の今後の発展を願ってやみません。

もうひとつの戦い

西高43期 横澤 宏一郎

監督がない

43期には“監督”としての先生が存在しなかった。42期の先輩方が先生と意見の食い違いから衝突。自主運営をするというかたちになった。先生は“顧問”であるにすぎなかった。

その一週間後、春の総体予選に敗れ世代交代が訪れた。私はいきなり、主将兼監督になった。練習メニューの作成、試合メンバーの決定、他クラブとの交渉……。プレー以外にやるが多すぎた。一選手としての機能が果たせなくなっていった。

つらかった。辞めようと思ったことも何度もあった。ずる休みしたこともあった。あんなに好きだったサッカー部を。

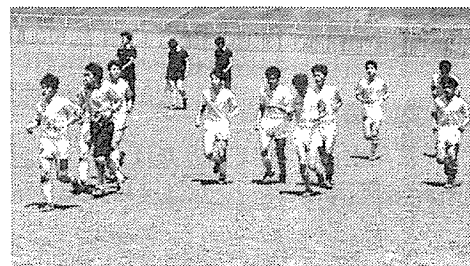
しかし、私を支えつづけたものがあつた。入部以来の目標。都大会出場。「俺たちが都大会に連れてってやる」一年生とき、マネージャーに言い放つた。行ける根拠は何もなかった。でも信じていた。地区予選を勝ち抜き、都大会に行けると。

1990年4月30日。駒沢第二球技場。高校総体地区予選決勝戦。43期として最後のチャンス。対都立駒場高校。10年後、全国高校サッカー東京代表になった名門校である。力の差は歴然としていた。圧倒的に攻め込まれた。耐えた。何度もピンチを切り抜けた。耐えた。しかし・・・0-2。

試合終了後、ロッカー室にしゃがみこむと、堰を切ったように涙が溢れ出した。一年間の緊張の糸がプツリと切れた。人目もはばからず泣いた。負けた。

主将として、この一年間は大変貴重なものだった。悔しさはある。今でも。

しかし、思い出として静かに、胸にしまっておこうと思う。



43期最後の試合
夢破れベンチに戻るイレブン

西高サッカー部と私

西高44期 大見 頼一

それは仮入部の時であった。グキッと膝がはずれたような気がした。ミニゲーム中に、アウトサイドのパスをだした直後であった。しばらくして、再度プレーをしてみたが、不可能だった。何が起きたのかよくわからなかった。

前十字靭帯損傷、手術をしてリハビリに1年必要というのが診断であった。それを聞いた時はショックはなく、手術をすればまたサッカーができると思っただけだった。とにかくサッカーがやりたかった。

それから長いリハビリ生活が始まった。一番困ったのは、何をどのくらいやっていいのかわからないことだった。病院では、基本的なことしか教えてくれなかった。だから、自分で勉強した。ウエートトレーニング、栄養、リハビリの種目等、関連のある本を読みあさった。部活中以外、昼休みも家に帰ってからリハビリ・トレーニングを行った。ただとにかく復帰してチームメイトとサッカーがやりたかった。

リハビリをやっていく上で心強かったのが腰塚先輩の存在である。腰塚先輩もケガが多く、よく一緒にトレーニングをした。先輩は常に妥協せず、自分を追いこんでいた。そして二人で復帰したら、ああいうプレーをしよう、ここはこうするべきだ等とよく話しあつた。腰塚先輩はつらいとは一言も言わなかった。根性のある先輩だった。

もう一人いる。我が44期のキャプテンである田中茂之君である。シゲは、私の中学時代のライバルチームにいた。シゲは、何かと私にライバル意識を持っているようだった。ちょっとした一言が私を挑発しているように感じた。彼にだけは負けたくなかった。リハビリがきつくなると、彼の顔を思いだし、頑張ることができた。

シゲは、練習が終わると、ふらりとトレーニングルームにきた。そして私がトレーニングしている重さより、ほんの少し重い重さでトレーニングを始めた。対抗して私も同じ重さでやった。彼には負けたくなかった。二人で競いあうようにトレーニングをした。もっとも、シゲは飽きてしまったのか、2ヶ月ほどで来なくなった。

こうして長いリハビリを終えて、高校3年の春に私は復帰した。代はもう後輩の45期であった。44期で残つたのは、シゲと横島と私の3人だけだった。

復帰してはじめての練習試合に出場した。44期のチームメイトも見に来てくれた。結果は散々だった。対一では抜かれる、裏はとられる、後半にはバテバテ。頭では、相手の動きが、手にとるようにわかつた。でも、体が動かない。くやしくて涙がでてきた。家に帰ると、広場でダッシュの練習をくり返した。

さらなる試練が私を待っていた。鍼治療によって肝炎ウイルスに感染したのだ。母は、私も初めて見たが、家で泣いていた。自然と私も涙がでたが、決してあきらめなかった。肝炎は安静が第一と聞いた。3週間入院しとにかく安静にしていた。最後の大会まで時間はあまりなか

ったが、我慢するしかなかった。ただ、手術した足の筋力が落ちると困るので、砂のうを借りて右足だけ筋トレを行った。

退院して少しずつプレーしていいと言われたが、どのくらいやっていいのかわからなかった。横畠とインターバルトレーニングを行ったが、恐くて自分を追い込めなかった。また、サッカーができなくなるのが恐かった。

そして、最初で最後の大会が近づいてきた。プレーは少しずつ良くなっていった。私がシゲにパスをだすと、シゲから「ここでパスが欲しかったんだ」と言われるようになり、ちょっとうれしかった。練習試合が終わるとみんなで、ああでもない、こうでもない意見をぶつけあった。そんな時間が妙に楽しかった。

最後の大会の相手は練馬工だった。天気は悪くなる一方で、後半はどしゃぶりだった。同点で迎えた後半、私にチャンスが巡ってきた。ゴール前にいる私にどんぴしゃりのセンターリングがきた。胸でトラップした瞬間、頭の中でゴールを決めガッツポーズをしている自分が浮かんできた。ゴールまでは5メートルもなかった。結果は空振りだった。そのままタイムアップし、PK戦に突入した。我が西高は、シゲと私がそろってゴールポストに当て敗戦が決まった。

今、考えてみると西高サッカー部での3年間は大切なことを学んだと思う。そして、たくさんの人々に助けられた。一生懸命テープを巻いてくれたマネージャー、私を受け入れてくれた45期の後輩達、いっしょに練習した44期のチームメイトそして両親に大変感謝をしている。みんなのおかげでプレーできた。と同時に大切なのは自分がどれだけやれるかである。みんなは私を助けてくれる。その中でどこまで努力できるか。重要なのはスピリットである。疲れても、つらくてもあきらめないでやり抜く。結局は自分との闘いなのだ。

現在、私はトレーナーの仕事をしている。高校の頃から、コンディショニングやリハビリを指導してくれるトレーナーが欲しいと思っていた。トレーナーがいれば、選手はもっと安全に復帰ができ、サッカーが楽しめると思っていた。自分のような選手には決してなりたい。自分のようになりかけている選手を一人でも多く手助けしたい。

ここでも大切なのはスピリットだ。選手の何倍も努力しないと、選手の信頼は得られない。言いづらいことも言わなければならない時もある。選手を追い込んで鍛えるには自分も追い込まなければならない。こんなスピリットの土台となっているのが、西高サッカー部での3年間の経験だと私は感じている。



振り返ってみて

西高45期 高橋 潤

私達45期は、ちょうど卒業して5年が過ぎ、この4月に社会人になった部員が多い世代です。マネージャー2名を含め、20人前後の部員数でした。西高全体で考えますと、校舎改築の影響を全く受けることなく、活動できた最後の代にあたります。練習後、グラウンドにすわりこみ話をしていたり、自主練をしている部員の間を麦茶を配りながら歩いた時もありました。マネージャーということでは、ちょうど安定期になりつつある時だったと私は思っています。マネージャーの仕事、意味など、先輩がいろいろあった上で獲得してきたことを伝えつつ、より良い形へという時だったのでは……。

日常の練習は、週5日で日曜日は練習試合が多かったです。木曜日はお休みでした。今でもなぜか覚えています。練習メニューは、キャプテン、副キャプテンを中心に菅井先生をはじめとした顧問の先生方やOBの方々にも協力していただいていたようです。雨の日は、格技棟で筋力トレーニングやビデオを見たりもしました。

公式戦については、私の中で一番印象に残っている試合のことを書きたいと思います。それは、高3の春の総体予選での対日大三高戦です。その試合に勝てば、目標であった都大会出場が叶うというものでした。前半、先取点をあげたのはうちでしたが、後半終了間際に2対2の同点となりました。結局、延長戦の末、3対2で負けました。細かいところはよく覚えていません。けれど、あの試合後の雰囲気、自分の気持ちは今でもはっきり思い出せます。あの時は、呆然としていて、とてもくやしかったです。でも、今では大切な思い出になりました。

最後になりましたが、私にとってサッカー部は西高時代の部活ということだけではなく、それを通じて得たものも含めて、とても貴重です。今さらですが、そんな経験を与えてくれた同期、後輩そして先輩、先生に大変感謝しております。ありがとうございました。

コーチとしての西高生活

西高46期 牛島 健

51期の都大会出場は、私にとって特別にうれしい出来事であった。と言うのは、私がGKコーチとして最も力を注いでいた時期に指導したのが51期であったからである。

私は1年間の浪人生活を終えた後、大学の1年～3年までの3年間GKコーチとして西高に通い続けた。はじめの1年目はおよそコーチと言えるような指導は出来なかったが、2年目からはその反省を生かし、多少システムチックに、先を見据えた指導が出来るようになった。丁度その2年目の年に入学してきたのが51期である。

1年目は自分の思い通りにならないプレーヤーにイライラした。プレーヤーは一生懸命やっ

ているのだから、何回指摘しても、どう説明しても、プレーに殆ど改善が見られなかった。私の説明の仕方の問題があるのか、それとも、プレーヤーのやる気が足りないのか、随分と悩んだ。

何がきっかけだったのか忘れてしまったが、ふとある考えに至って、スパッと割り切ることが出来た。ある考えとは、そもそも「西高サッカー部を強くしたい」と言うのは私の勝手な野望であって、プレーヤーがどう思っているかは関係ないということであった。今まで「後輩のために」とか言っていたのは私に関して言えば、偽善であった。勿論、後輩はかわいいが、西高を強くしたいのはあくまで自分であって、重要なのはそのために自分は何をするかである。後輩が何をしているかではない。そう考えたら、プレーヤーに文句を言うのは何の解決にもならず、自分がどうやってプレーヤーをいい方向に導くかが重要であることに気が付いた。

そうして、私は自分の野望のために残りの2年間を捧げた。自分の野望のために時間を費やしたのだから、非常に充実していて、それほど苦はなかった。

最後に、もう一つ目論見があった。それは私が指導したプレーヤーが卒業後にGKコーチとして西高に来るように仕向けることであった。そうすれば、私が直接関われなくなってからも、私の野望（西高サッカー部を強くすること）は成し遂げられることになるのである。

私の宝物

西高47期 田村 佳美

私の高校生活は、そのほとんどが部活でした。入学した時、マネージャーは人のために働いていると思っていた私自身が、どうしてマネージャーになったのか自分でもわかりません。でも、マネージャーの仕事は3年間で多くのものを与えてくれました。部員さんたちと一緒にプレイしていたわけではないのに、3年のうちに自分も部員の一人であるような気がしていました。私は、部員さんたちに負けなくらい、サッカー部を通して充実した高校生活を送ったと思います。

私たちの代の引退試合（春の大会）の時、私たちマネージャーが一生懸命に作ったお守りのマスコットを、その後もずっと大切に部員さんが持っていてくれた事を知った時、とても嬉しかったです。一体感を感じることができたのだと思います。

私は、卒業してからも、同じ代の部員さんたちと仲間になれること、かわいがって下さる先輩たちがいること、この二つが、私が西高に与えてもらった宝物だと思っています。サッカー部で私が学んだ事や得た物は、私の人生において、とても貴重なものになると思います。



48th サッカー部

西高48期 山口 真司

西高に入学し、まだ右も左もわからない中で、僕らのサッカーへの意欲を最初に掻き立てたのは、一つ上（47th）のマネージャーである田村さんと久富さんの存在であった。もちろんほとんどの者が最初からサッカー部への入部を決めてはいたものの、その魅力に心を躍らせ、内なる闘志に火を付けたものである（それ以上はあえて書かないが・・・）。仮入部期間を終え、入部した部員は18人（菅野は1～2週間後に入部）いたものの、マネージャーは仮入部期間にやめてしまっていなかったもので、先輩に捜せと言われ、ちょうどクラスで野球部のマネージャーの勧誘を受けていた3人（高橋、長澤、生沼）に目をつけ、「甲子園」VS「国立」の討論で勝ち、野球部から奪うような形で勧誘に成功したのである。こうして48thが部員18人、マネージャー3人でスタートした。

（まだ問題はあったのだがそれは後ほど・・・）

お正月にテレビで見る選手権しか高校サッカーを僕は知らなかったもので、最初は驚きの連続であった。まず第一に驚いた事が、僕らのチームメイトの過去の経歴であり、中学時代、都大会優勝経験のある谷口、都大会ベスト8経験のある塚原、野崎、区で優勝経験のある鈴木、さらには幼稚園の頃から静岡で鍛えられていた永井など、無名で下手くそであった僕にはその名前を聞いた時は喜びと不安で複雑な心境だった。しかし、それ以上に驚いたのが練習であった。高校サッカーを中学サッカーの延長程度にしか考えていなかったもので、霜田キャプテンを中心としたハードな練習はついていくのもやっとなりで、自転車通学にもまだ慣れていなく、最初の2、3か月はサッカー以外体力的に何もする余裕がなかった。中でも最もきつかったのが夏の合宿で、5泊6日の間まともにボールを触った記憶もなく、三浦先生の指導の下ひたすら走りこんだ。炎天下の中、次々と脱落者が出る中で、僕は苦しくて目を閉じて走ったのを覚えている。（というより走った事と寝た事以外記憶がない。）先輩たちと混ざって練習をしていた永井や谷口らをうらやましがっていたものである。しかし、この合宿で、多少つらいことがあっても乗り切れる精神は身に付けることができたような気がする。この時期に改めて出てきた先ほど書かなかったもう1つの問題、最大の問題は僕らの代にキーパーがいないことであった。選手権までは牛島先輩がいたものの、引退後は佐藤先輩1人になり、紅白戦もできない、大会も控えがなくなるといった状態になったので、今からサッカー部以外から探す事もできず、僕らの中から選ぶことになり、背が高いという理由で僕と大橋、菅野、樋口が候補に上がり（谷口と塚原は有望株だった（？）ので除かれた）、最終的に大橋が引き受けてくれた。（大橋に対してはその成長度も含めて大いに感謝している。）

2年生になり、桜井、鈴木、三木ら優秀な1年生も加わって、いよいよ僕らの代をむかえ、キャプテンは満場一致（というよりもその威厳・風格で1年の時から決まっていた?!）で永井、部長もなぜか僕に決まっていた。副キャプテンは投票の末谷口、評議委員（？）に菅野が

決まり、三役(+1?)も決まった。三役の主な仕事はチームを引っ張ることもしかるべきことながら、菅井先生とのミーティングであった。練習メニューや試合のメンバーを予め僕らで決めておき、それを菅井先生に持ち寄って話し合うという形式を取っていたが、その目的さえはっきり示せば菅井先生も認めてくれたので、僕らは大体において自由に活動することができた。順調にスタートを切った中で僕らの一番の悩みは校舎改築のためグラウンドがない事であった。唯一ハンドコートは使えたのだが、下高井戸運動場やNHKグラウンド、松の木運動場などのグラウンドを借り、授業が終わるとすぐに自転車で向かって、短い練習時間を有効に使えるようみんなで協力しあった。それでも十分ではなかったので、試験期間中(部活は原則として禁止)にみんなでミニゲームをしたりして汗を流したものである。11月に行われた初の公式戦である新人戦は、準決勝まで進んだものの、国学院久我山高校に負けてしまった。(同校は選手権では都大会決勝まで進み、あと一步で全国だった。次の年は全国大会に出場している。)強敵だったものの、力不足を感じた一戦であり、その後の1週間(?)はこの上ない意気込みで練習したのを覚えている。杉並区民大会では新人戦後の成長度を見るとともにV2がかかっていたので、気合い十分だったのだが、流行していたインフルエンザに悩まされ、メンバーも集まらず、予想以上に苦しい戦いが続いた。それでも何とか決勝まで進み、初めてベストメンバーも揃った中で見事優勝を収めることができた。この日のことで今でも覚えているのが優勝しても誰も喜ばず、一人で浮かれていた自分、試合後、大泉高校と練習試合が入っていたため、下高井戸運動場から大泉高校まで10km以上の道程を自転車で大移動し、疲れ切った中で試合をしたことである。(結果はボロ負けだった。)僕らの代になってから数多くこなしてきた練習試合の中で、印象に残っているのは、国学院久我山高校、東亜学園高校、函館北高校との試合である。久我山高校との試合は、冬の寒い夜の中下高井戸運動場で行い、相手の攻撃を完璧に押し、打たれたシュートも0本で、攻撃もリズム良く2-0で完勝した。東亜学園との試合は僕にとってのベストゲームであった。相手校のグラウンドは観客席が付いていたので自然とやる気が出、更に相手のFWが190cmという長身の国体選抜候補で僕がマンマークを任され、周りのフォローもあってほぼ完璧に押えることができ、攻撃も桜井のハットトリックなどで見事3-0と快勝した試合であった。そして練習試合の中でみんなが一番集中していたのが函館北高校との試合で、この高校は北海道ではベスト4にもなったことがあるという強豪(?)らしく、42thの鈴木先輩が組んでくれた試合であった。「強豪」や「名門」という言葉がつく高校との試合を望んでいた僕らは、その日2試合目(1試合目は武蔵丘とだった)にもかかわらず、その力をフルに発揮し、5-0と圧勝した。その他の練習試合でも順調な結果を出しつつ、いよいよ春のインターハイ予選を迎えた。1, 2回戦を順調に勝ち進み、決勝の相手は東京農大一高校であった。先制し、追いつかれ、均衡したまま延長戦まで進んだのだが、あと一步のところ逆転され負けてしまった。(同校も選手権では都大会の準決勝まで進んでいる。)野崎が開始直後に先制した場面、僕の体が止まってしまっただけで決められた場面、僕の体の横を通り抜けていった逆転シュート、終了のホイッスルの音、ベンチで三浦先生に慰められ泣いてしまった自分が今でも頭の中に鮮明によみがえって、鳥肌が立ち、涙が出そうになる。おかげさだと思ふかもしれないが、その後何回も夢を見た。“今度は勝ってる。都大会

だ……。”はっと目が覚める。その度に負けたことの悔しさを思い出した。

僕らの代は一応終わり、最初永井と塚原を残して他は引退を決めていた。僕も当初から親との約束もあり、受験勉強のため引退を決めていた。放課後、バスケット部やアメフト部はまだ部活をやっている中で帰って勉強する自分がとてもやりきれなかった。更にその1週間ほど後に梶本が夏まで残ることを決めた。これが僕の決心をぐらつかせ、“部活を続けていたって自分がやる気なら勉強はできるはずだ。サッカーが好きだから、春で負けた分もできるところまで続けたい。”と考え、親にもその考えをきちんと話し、夏まで残ることを決めた。柳沢、木村、今田など見所のありそうな1年生もいたが、桜井をキャプテンとする2年生が思うようにまとまっていなく、試合でも勝てず、春でやめていったみんなが残っていれば……と残った4人で勉強せずに悩んだときもあった。合宿でもチームの気合いが入っていなく、夜遅くまでミーティングをしたりもしたが、その後は何とか立て直し、あっという間に最後の選手権を迎えた。1回戦は苦戦の末勝利し、一生忘れることはないであろう8月22日の2回戦(準決勝)を迎えた。相手は杉並工業高校。会場は早稲田高等学院。2-2で迎えた後半終了間際、突然雷雨になり、グラウンドがゆるみ始めた中、僕は相手選手と交錯し、手が絡んだまま転倒し、手首を骨折してしまった。結局試合はそのまま終了し、雷雨のため(同点でPKだったが)一時中断する中、僕は救急車で病院に運ばれた。涙が止まらなかった。後で聞いた話だが、その後のPKはチームが今までにないまとまりを見せ、見事勝ってくれた。次の日の決勝戦、僕は右手にギブスをつけ、見学した。僕らの代になってから約1年間、初めて試合に出ない日であった。試合はみんな頑張ったものの0-2で負けてしまった。春に負けたような悔しさではなく、みんなに申し訳なくて涙が出た。その日は残った4人でファーストフードで放心状態で夜までいたのを覚えている。こうして48thの高校サッカーは終りを告げた。組み合わせに恵まれなかったこと、春で負けたこと、みんなで夏まで残れなかったこと、1番大事な時に骨折したことなど悔しかったこと、苦しかったことを思い出せば切りがないけれど、ここで挙げるができなかった芦村、佐々木、高野、照井、前田、松下、宮本、吉無田、その他にも46th、47th、49th、50thの部員など、素晴らしい仲間にも巡り合え、寺田さんを初めたくさんのOBの方にもお世話になったとても充実した3年間であり、最高の代であったと自信を持って言える。



1997年6月21日に行われたOB会総会に集まったOGを交えての一こま。西高サッカー部OB会の名称も西高サッカー部OBG会としなければ……。

わたしの宝物

西高49期 武山 倫子

個性豊かな49期は、いつも明るく楽しくとても元気でした。実力は、どこの私立にも負けないくらいでしたが、いざ公式戦となると、相手校が堀越だったり、いつもの力を発揮できなかったり・・・、惜しくも都大会へは出場できず、残念でした。

夏も冬も朝から晩まで部活中心に過ごし、泣いたり笑ったりのたくさん詰まった3年間は、わたしの大切な宝物です。サッカー部に入って本当によかったと思います。顧問の菅井先生、三浦先生、越部先生、そしていつもわたしたちを気にかけて下さる寺田さんたちOBの皆さんに心から感謝しています。

いつまでも大好きな49期の仲間達を大切にしたいです。

サッカーがしたい

西高49期 丸川 和夫

ボールを蹴るだけで幸せだった。レギュラーになる事は夢だった。そのためには努力が足りなかったことも知っていた。そんな高校3年間だった。今はフィールドに立ちたい、ボールを蹴りたい、サッカーがしたい。そしてどこでもいい、選手としてなにかに勝つためにプレイをしたい。浪人をした僕にとってなにかもが夢となってしまった。そして衰えて行く自分の体を見ている事しかできない。今はサッカーがしたい。ただそれだけだ。

マネージャーの仕事

西高50期 鈴木 里英子

マネージャーの仕事は、大きく分けて「外交」と「会計」に別れるのですが、50thはちょうど2人だったので、お互いに責任を持って、仕事ができたとします。私の仕事は「外交」でした。毎年2年生の秋に引き継ぎで1年生に全部まかせることになっていたのですが、1年生のマネージャーが1人しかいなかったため、3年生になる頃まで、仕事をしていました。

そのため2年生の時は、部活の仕事に追われる毎日で、あっという間に過ぎ、春の大会になってしまいました。決勝戦で負けてしまい都大会に行けず、引退となってしまいました。OG、OBになっても部員とは現役のころと変わらず、むしろもっと仲良くなれたと思います。

高校時代にマネージャーといういい経験ができてよかったと思います。

財 産

西高50期 柳沢 祥康

校舎改築に伴う校庭改修工事のために、先輩方と同様に、50期生は入学当初から2年生の3学期までサッカーをするには非常に不便な状況にありました。

校内では、2年生の夏まで唯一ハンドボールコートが練習場となり、朝練などでは、ただでさえ狭いのにアメフト部と共有して練習し、そのハンドコートが使えない日も、プレハブ校舎との間にあった幅が僅か5メートル程のスペースを利用してミニゲームなどをしたり、学校の周りを走る、いわゆる「外周」をしたりなど、少しでも多く練習ができるように工夫し、努力しました。

また校外においては、NHKグラウンド、下高井戸グラウンド、桜水商業高校、永福高校、向陽中学校などの諸施設を利用することができましたが、なかでも下高井戸グラウンドや向陽中では午後6時からの活動という日もあり、帰宅するのは10時すぎになることもしばしばでした。しかし、このような数々の施設を利用することができ、あまり不自由を感じることなく活動できたのは、菅井先生をはじめとする顧問の先生方、OBの方々やマネージャーたちの助けや協力があってこそであり、心からお礼を言いたいと思います。

さて、3年生になってようやく校庭が完成したのですが、総体地区予選の2回戦で破れてしまったために、50期生の多くが約1ヶ月間しか新しい校庭で練習することができませんでした。しかし、毎日昼休みになれば自然と校庭に集まってミニゲームをしたり、テスト期間中にも学校に残ってサッカーをしていました。本当にサッカーが大好きな連中が集まったのでしよう。本当にいっしょにサッカーをしていて楽しい仲間たちであったし、ただ楽しいだけではなくまとまりもあり、それは他の部の人から、うらやまれるほどのものでした。

思えば高校時代の思い出といえば、真っ先に彼らの顔と楽しさと苦勞を共にした日々が思い浮かびます。とにかく、西高50期サッカー部の一員であることに幸せを感じ、そう思えるほどのすばらしい仲間たちに出会えたことが、きっと大きな財産となるに違いないと思います。



1997年9月27日練馬区役所を会場として開催した西高サッカー部創立50周年記念パーティーで挨拶するOB会会長寺田格郎氏。



1949年製作の西高サッカー部バックル
実物は写真の70%、デザインは2期生
と3期生で考案した。
右上校章は十高のもので、未だ西高の校
章は決まっていなかった。